2315　離島覚書（長崎県・海栗島）

鰐浦の韓国展望所より海栗島を望む（手前は鰐浦漁港）（2021 年９月撮影）

令和５年８月 30 日

海栗島分屯基地

海栗島（うにしま）は対馬北端の鰐浦の北・約１㎞に位置する。面積は 0.09 ㎞^{2}、周囲は 2.1 ㎞で、東西に細長い島である。対馬市内の有人離島は沖ノ島、赤島、泊島、島山島と海栗島の５島であるが、橋で本島（対馬島）とつながっていないのはこの海栗島だけだ。

鰐浦の集落背後の韓国展望所からは海栗島が一望できるが、この日はあいにく展望所が工事中で立入りが禁止になっていたため、２年前に訪問した時の写真を掲載した。

島の周囲は断崖絶壁が続き、容易に人を寄せ付けない。いわば自然の要塞である。そして島の全域は航空自衛隊の基地になっていて、一般人は住んでいない。したがって一般の船も通っていない。

「海栗島」の語源は、かつて周辺で良質のウニがたくさん獲れたことによるとされる。しかし、近年の水温上昇に伴って磯焼け現象が拡大しており、現在、ウニはほとんど獲れないという。

海栗島には 1867（明治 36）年に旧陸軍の無線基地が設置され、1935（昭和 10）年には砲台がつくられた。終戦までは軍事基地であり、一般人の立ち入りは禁止されていた。ちなみに「国境の島」・対馬島には、砲台跡が全部で 31 ヶ所あることが知られており、海栗島砲台もその一つである。

戦後は民間に払い下げられ、一時、農地として使用されていた。しかし朝鮮半島の緊迫化に伴って、米軍が 1947（昭和 22）年にレーダー基地を設置した。その後、1959（昭和 34）年に航空自衛隊に移管され、現在は海栗島分屯基地（西部航空警戒管理団第 19 警戒隊）が置かれている。なお 19 のナンバーは米軍時代のものが引き継がれているらしい。

一般人が島に渡るには航空自衛隊の許可が必要である。４年ほど前に基地見学を申し入

れていたが、その後すぐに新型コロナウイルスが流行し始めたため、訪問が実現できず、延び延びになっていたのがようやく実現し、今回の訪問となったものだ。

前泊した東横イン対馬比田勝を出発し、泉、豊の各集落を抜け、鰐浦漁港に着いた。広報担当の藤原さんから指定された駐車場にレンタカーを停めて船の乗員が来るのを待つ。出発の 30 分ほど前に到着したのだが、そのうち迷彩服姿の藤原さんが現れた。どうやら私を迎えに、朝一便で海栗島から渡ってきたようだ。

連絡船

海栗島に勤務する自衛官は、交替で 24 時間勤務している。日本離島センターが発行している「シマダス」によると、2020 年国勢調査時の島の人口は 64 人と書かれている。３交替勤務とすると、おそらく３倍の 200 人ほどが基地に勤務しているのだろう。

勤務時間以外は豊の集落に３棟ある自衛官宿舎に住んでいるから、朝夕、鰐浦漁港から船に乗って通勤している。もちろん夜勤で島に滞在している人も多数いる。

通勤及び仕事の関係で海栗島に通う人は「かいせい」と「あさつき」という船を利用する。この２隻の運航は地元の会社が自衛隊から受託しており、自衛隊はアウトソーシングしていることになる。乗員は３人である。

連絡船は基本的に１日６便運航されている。ただし月水金の３日間は１日７便に増便される。朝１便は鰐浦発７時 45 分で、通勤の自衛官が中心だ。また第６便は鰐浦発 17 時で、こちらは勤務を終えた自衛官が戻ってくる。月水金の最終便は鰐浦発 19 時になる。第１便と第６便は少し大きい「あさつき」が使用され、それ以外は「かいせい」が使われている。

海栗島に勤務する自衛官は官舎のある豊の集落から連絡バスを利用するか、あるいは自家用車やバイクで港との間を往復している。船の乗員の話では通勤時の乗客数は 60～70 人ほどだという。第１便と第６便以外の昼間は基地に用事のある業者や休み明けの隊員が乗る程度で、乗客は少ない。

第２便の８時 55 分発の「かいせい」に乗る。私と藤原さんのほかに皿洗いの地元女性２人と自衛官１人が乗り込んだ。鰐浦と海栗島の間は約１㎞ほどなので、所要時間は５～６分ほどだった。基本的に海栗島や隣に並ぶ海老島が風よけとなってあまり時化ることはないようだ。

専用桟橋から上陸し、守衛所で運転免許証を身分証明書代わりに提示し、入構証をもらう。

連絡船の「かいせい」と「あさつき」

管理棟

桟橋からすぐのところに「辺要の精鋭」と書かれた基地開設 50 周年を記念した石碑が置かれていた。ちなみに海栗島分屯基地は今年で 67 年を迎える。桟橋の反対側には潮位計が設置され、陸側にはオイルフェンスが置かれていた。海岸には漂着ゴミが圧倒的に多い。藤原さんによればハングル文字が書かれたペットボトルが目立つとのことで、韓国から流れついたものが大半のようだ。

基地内の各所では隊員たちが草刈りをしていた。何でも９月に入ると、自衛隊の上層部の人が視察に来るそうで、それまでに基地内の草を刈り、きれいにしておくのだという。基地は広いから大変な作業である。でもこういう機会がないとなかなかきれいにすることはできないのも事実だ。

ヘアピンカーブの坂を登り、台地上に出る。ちょうど桟橋の反対側にあたる位置に海栗島分屯基地の管理棟が置かれている。標高は 20mほどである。もともと起伏のある土地だったと思われるが、米軍が基地を整備した時に整地したのだろう。管理棟は３階建てで、２階の応接室に案内された。ちなみに３階は独身者の宿舎になっているとのことだ。

藤原さんの上司にあたる佐藤さんという方が現れた。藤原さんによると基地のＮｏ．２らしい。藤原さんがアイスコーヒーを持ってきてくれた。コーヒーを飲みながらしばし佐藤さんに基地のことや国土防衛について話を聞く。応接室の窓からは正面に韓国・釜山の市街地が見えるといって双眼鏡をもってきてくれた。釜山までは直線距離にして約 40 ㎞しかないので、海栗島は日本で一番外国に近い場所なのである。あいにくガスがかかっていて市街地を見ることはできなかった。

利尿剤を飲んでいるからトイレが近い。事務所のトイレを借りたが、さすがに清掃が行き届き、清潔である。ところが女性用のトイレもあった。つまりこの基地には女性の隊員がいることになる。佐藤さんにお伺いすると、最近、女性隊員が増えているとのことで、現在は８人いるそうだ。

海栗島の桟橋（左）、管理棟の入口で佐藤さんと一緒に記念撮影（右）

食堂と売店

早速、佐藤さんの案内で基地内を視察する。最初に管理棟の１階をのぞいた。１階には食堂と売店が置かれている。

食堂はゆったりと 30 人ほどが座れるスペースがある。食堂の反対側が厨房で、自衛隊員

が食事を作っている。ただ、片付けや皿洗いの仕事は地元のおばさんを雇用しており、朝の船で一緒だったことはすでに述べた。

食事のメニューは半月分が決まっていて、メニュー表がテーブルの上に置かれていた。ご飯が圧倒的に多く、パン食は土曜日の朝食だけだ。また毎週金曜日の昼食はカレーである。このように曜日によって特定のメニューが並ぶのは、24 時間の交替勤務で曜日の感覚がなくなるため、食事のメニューで曜日を知らせる意味もあるそうだ。またこの基地のオリジナルメニューが「国境空上げ」である。鶏の唐揚げなのだが、地元特産のアゴ（トビウオ）入り醤油に漬け、韓国唐辛子を加えたもので、地域色を出すべく、工夫が凝らされている。

１日あたりのカロリー量は 2,000～3,000kcal である。食事はきちっと管理されているから隊員に肥満の人はいない。料理の素材は肉類が多い。８月後半のメニューで使われている水産物はアジ、サバ、サケ、サワラだけであった。もちろん食中毒の心配があるから、生のものはない。

食堂の向かいに売店もある。菓子やカップ麺、それにビールや焼酎などの酒類も売られている。たぶん独身者で３階に宿泊する人などが利用しているのだろう。

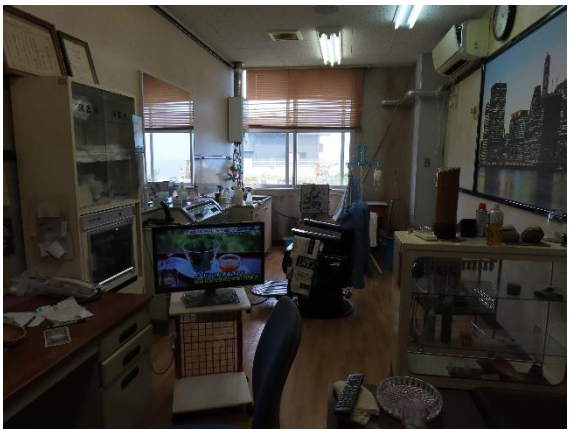
基地内の食堂（左）、売店（右）

理容室

基地正面玄関で佐藤さんと並んで記念撮影し、歩いて基地内を案内してもらう。管理棟の裏に試験倉庫などがあり、その上に宿舎（寮）があった。ここは基本的に妻帯者が泊まるようだ。宿舎の１階は共用スペースになっていて、理容室も置かれている。ドアをあけてちょっと中をのぞかせてもらった。椅子が一つあり、男性の理容師が１人いたが、顧客はいなかった。

後に連絡船の乗員に聞いたところでは、理容室の男性は 80 歳前後で、基地で 50 年ほど理髪業を営む超ベテランだという。おそらく基地の生き字引かもしれない。高齢の今も、毎日、基地に通っているらしい。自衛官は私などと違って髪を長くする人は稀で、月に１回は理容室を利用すると思われるので、安定的に仕事があるのだろう。

宿舎の先には大きな体育館が置かれている。隊員のレクリエーション活動の場であるとともに基地の行事などに使われている。基地内の道路は一部を除いて舗装されており、歩きやすい。



宿舎の１階にある理容室と廊下（左）、理容室の内部（右）

運用局舎

宿舎に続いて基地内を案内してもらう。ただし防衛業務に関する施設や装備の写真撮影は禁止されている。写真を撮る場合は許可が必要である。このため、基地の中枢であるレーサーやアンテナの写真はない。

基地の中心は２つのドーム型のレーダーである。一つはミサイルなどの弾道追跡用のもので、もう一つは航空機向けのものだ。

近年、北朝鮮は頻繁にミサイル発射を繰り返している。ミサイルの弾道追跡はＪアラート（全国瞬時警報システム）などの警報発令のために不可欠であり、国民を守るために極めて重要な任務を帯びている。一方、中国やロシアなどからの航空機による領海侵犯の恐れが増している。台湾をめぐる国際的緊張が高まるなか、航空機の監視も重要な抑止能力として重要性を増している。

２つのレーダーは 24 時間日本の上空を監視し、そのデータは運用局舎と呼ばれる建物で解析・処理されている。この建物は厳重に管理されており、基地内の自衛官でも中に入れる人は限られている。建物に窓は一切なく、電磁波が外に漏れないように、建物壁面は特殊な塗料で塗装されているらしい。

また基地内には送信用と受信用の巨大なアンテナがそれぞれ１基ずつ立つ。外部との情報交換はすべてこのアンテナによって行われている。

黒い建物が運用局舎（左）、本島からの電気・水道の中継地・海老島（右）

基地の運営に必要な電気や水などのインフラストラクチャーは本島側から海栗島の隣に

ある海老島を経由して供給されている。もちろん非常用の電源は完備されている。

余談だが、海老島を通じて本土からイノシシやシカが海栗島にも入り込んでいるという。

ヘリポート

食料品や日用品、軽いものは連絡船で運ぶが、少し大きなものは台船をチャーターして基地まで運ぶ。しかし、さらに大きなものはもっぱらヘリコプターが使われている。

島の東はずれにこのためのヘリポートが整備されている。周辺に樹木はなく、まっ平である。ヘリポートの脇に白くて丸い牧草のサイレージのようなものが置かれていた。この物体はヘリコプターから消火用の水を散水するために水を入れる袋のようなもので、水をヘリコプターから散水する訓練の時に使用するらしい。山火事の時にヘリコプターから放水するテレビ映像を見ることがあるが、例の水を入れるタンクのようだ。

ヘリポートから北側の沖に三ツ島（北ノ手、高ノ島、大島）が見える。大島には日清戦争直前の 1894（明治 27）年に設置された三ツ島灯台がかすかに確認できる。また、海岸に下る仮設の階段もつくられていた。

ヘリポートから歩いて管理棟に戻る。応接室でお茶の提供を受け、帰りの船の時間まで待った。

11 時 50 分の連絡船で鰐浦漁港に戻る。帰りの船には私の他に、勤務あけの若い自衛官と中年の自衛官の２人が乗り込んだ。

レンタカーに乗って集落のはずれまで来たところで、先行していた私服姿の若い自衛官が噴き出る汗をもろともせず歩いていた。「どこに行くのか」と尋ねると、比田勝だという。勤務あけで明日まで休暇だそうで、比田勝から船で博多方面にでもいくのだろうか。比田勝まではおよそ 14～15 ㎞あるから、３時間ほどかかるだろう。本人は「体を鍛えるためだ」といってそのまま歩いていった。冷房の効いた電車の優先席にだらしなく座っている都会の若者とは雲泥の差である。

島東部のヘリポート（左）、訓練に使用する水散布用の袋（右）